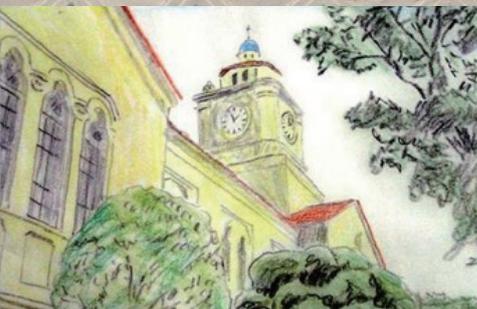


Museum News



絵：柳田 基

2024 展覧会

平常展 ヴォーリス建築写真展 「VORIES TIME」

2024.5.13(月)▶7.13(土)

※詳細は4ページをご覧ください。

平常展 学生たちの大学昇格運動 —関西学院新聞からみる学院史展 特集陳列 カラフル！

技でみる日本の蔵書票

2024.7.29(月)▶9.14(土)

休館日：日曜日、祝日、

8月10日(土)～8月21日(日)

(但し8月4日(日)は開館)

関西学院に大学が設立されたのは今から90年以上前、1932年のことでした。平常展では、神学部、中学部、高等学部で構成されていた学院に大学が設立されるまでの歴史を、1922年から続く学内新聞『関西学院新聞』を通して紹介します。

特集陳列では大学博物館のコレクションから蔵書票を展示します。日本の蔵書票は他国のものと比べて制作に使われる技法に多様性があることが特徴だとされています。また、蔵書票は道具としての枠を超え、鑑賞物としても愛好されています。本展では、制作する画家たちの個性や愛好家たちによる鑑賞方法の広がりや「蔵書票のカラフルさ」と捉え、紹介します。

天を見あげて、愛の音ずれを —ヴォーリスと関西学院を結ぶもの

15年ほど前の夏、ある研究会のフィールドワークで親しい仲間たちと共に盛夏の近江八幡市を訪れた。目的は琵琶湖に臨む同市でウィリアム・メレル・ヴォーリス (William Merrell Vories, 1880-1964) の建築と足跡を辿ることであり、実際に彼が設計に関わった病院、学校、邸宅等を訪ね、それと見て分かる懐かしさを感じる美しい建築物、簡素で包容力のある空間や細部の可愛らしい遊び心、そしてそれらに窺われる彼の思想と信仰の痕跡に感銘を受けた。酷暑であったが、清涼ささえ感じさせる美しい造形物と水流の溶け込んだ町の景観に癒やされた。

彼の建築作品は大丸百貨店心齋橋店、大同生命ビル、そして本校関西学院など千有余に及ぶが、1964年の彼の没後も一粒社ヴォーリス建築事務所がその働きと精神を受け継ぎ、多くの作品を現在でも新たに手掛け続け、その独自の位置を保っている。ヴォーリス建築と共に発展してきた関西学院では上ヶ原キャンパスの時計台が2009年に登録有形文化財に認定されており、2022年には建築学部にはヴォーリス研究センターが開設されている。建築家としての彼の名声はますます高まっているようである。時を経ても減じることのないヴォーリス建築の魅力とは何であるのか。この問い自体が大きなものであるが、それを紐解く手がかりの一つは彼とキリスト教信仰との結びつきにあると確かに言えるはずである。

建築設計者、事業家として知られるヴォーリスは、キリスト教の宣教師であり、情熱をもったひとりの信仰者であった。1880年にアメリカ合衆国に生まれ、病弱であった少年時代を雄大な自然を持つアリゾナで過ごし、高校卒業後は建築家への志を持ちながらコロラド大学に進学する。この大学時代に、カナダでのキリスト教宣教師の集会に大学代表として出席した際、ある宣教師の講演に胸を打たれ、海外宣教を決意する。卒業後、北米YMCAを通じて近江八幡の商業学校の英語教師の職を得て、1905年より遙々着任し、ほどなく自宅でバイブルクラス(聖書研究会)を開催するようになる。しかし、はや1907年には学生に対するキリスト教への感化をめぐって反発を受け、同校を免職となる。奇しくも、この挫折こそが彼にとってのもう一つの転機となった。解職後の貧困の中で、ヴォーリスに建築の造詣があることを知る宣教師やYMCAの繋がりから彼

に与えられたのが建築設計の仕事であり、ここから「建築士ヴォーリス」(当時の広告での実際の表現)の歩みが始まるのである。教会、学校、一般施設等の建築設計のみならず、幼稚園や結核療養所「近江療養院」の開設、メンソレータムの輸入販売なども手掛けた。教育者であった一柳満喜子という伴侶を得て、やがて1941年には日本国籍を取得し、一柳米来留(ひとつやなぎ・めれる)と改名した。来日直後より宣教師向けの月刊誌「ジャパン・エヴァンジェリスト」に自作の詩を投稿していたようであるが、自らの信仰と生涯をも表示するように「芥子種」という表題の詩を日本名で残している。

「ある人が一粒の種をまいた それは小さなものであったが 彼の主であり王であるお方の畑にまいた 芥子種の一粒であった それは生長繁茂して 仕事に疲れた彼の頭を その陰に憩わせるほどになり その枝のあいだには たぐいまれなかわい小鳥が巣を作って 讚美の歌を歌った それで 小さな種をまいたその人は そのつまらぬ業のはずかしさを忘れた また ある人がその生命をささげた それは小さなものであったが 彼はそのもてるすべてを 彼の王であるお方にささげたのであった 主は彼を暗黒の住む地へつかわした… それは寂しい土地であったが 彼は天を見あげつつ 望みなき人々に愛の音ずれをもたらした するとむなしくやみにさまよう多くの人々は 霊の生命へと生れかわった… 乏しき世界に注ぎつくした彼の生命は 芥子種のように繁殖して行った」(一柳米来留『失敗者の自叙伝』)

ヴォーリスの眼差しの向きは、彼の作品の奥行きを知るための貴重な手がかりである。この詩に表現される彼の「天を見あげ」る精神性は、関西学院の上ヶ原キャンパスの設計にも、そして関西学院の根底にあるものにも深く通じている。キャンパス正門の前に、天を仰ぐようにして山々を見上げ(詩編121編)、中に踏み入ると、正面の中央芝生の向こうに時計台(大学博物館)がある。そこで今年5月から日本全国のヴォーリス建築の写真展を、9月末から関西学院のヴォーリス建築の企画展を予定する。この機会にヴォーリスと彼の建築についてその魅力の秘密を紐解く精神性にまで触れ、混迷する時代を生きる関西学院の源流に思いを馳せたいと願っている。

(大学博物館 副館長 橋本祐樹)

展覧会報告 |

企画展

寿岳文章展

— 領域なき探究：英文学、民芸、和紙研究 —

関西学院が生んだ著名な文化人の一人、寿岳文章の幅広い研究活動について紹介しました。

2023.10.10(火) ▶ 12.9(土)

※休館：日曜日、祝日（但し11月3日(金)、11月19日(日)は開館）

開館日数 53日

入館者数 1901人



2023.

10.10(火) ▶ 12.9(土)

開館時間：午前9時30分～午後4時30分（入館は午後4時まで）
休 館 日：日曜日、祝日（但し11月3日(金)、11月19日(日)は開館）
関西学院大学博物館（西宮上ヶ原キャンパス時計台）
〒628-8502 西宮市上ヶ原4-1-1 関西学院大学西宮キャンパス内（西宮駅西口徒歩10分）
（入館無料）
後援：NPO法人向日庵、西宮市
実行：『寿岳文章展』実行委員会
The Book of First 47 Years of the Exhibition
監修：『寿岳文章展』監修委員会（『寿岳文章展』実行委員会、1944年、新法地蔵）NPO法人向日庵

寿岳文章展

Jugaku Bunsho

— 領域なき探究：英文学、民芸、和紙研究 —

時系列で見つめる

寿岳の知の在り方

本展では1923年に関西学院高等学部文科英文学科を卒業し、1932年から20年間、学院の教員として主に英文学を担当した寿岳文章（1900-1992）の研究活動について紹介しました。その研究は専門分野を横断するような内容で、まさに「領域なき探究」といえるものです。彼の代表的な業績を並べると、次のようになります。

1. 英国のロマン派詩人ウィリアム・ブレイクを研究した英文学者
2. 英国から日本に書誌学を導入した第一人者
3. 世界的に評価が高い私家版『向日庵本』を出す書物工芸家
4. 正倉院の和紙調査を率いた和紙研究家
5. 読売文学賞を受賞した『神曲』の翻訳者

一見すると分裂した研究だと思われるかもしれませんが、寿岳にとっては連続性を持ったものでした。この連続性をあらわすために、会場では寿岳の研究にまつわる資料を時系列に展示することにしました。資料の連なりからは、英文学から書誌学、そして私家版出版、和紙研究へと広がっていく寿岳の強い探究心と研究の実行力、また背後にあるさまざまな人びととの出会いが浮かび上がってきました。



◀展示室の様子

展覧会をつくる

資料の借用

寿岳の「領域なき探究」の軌跡をあらわすために、本展では資料を大きく3つのところからお借りすることにしました。関西学院、寿岳ゆかりの施設、そして個人のコレクションです。

はじめに学院に所蔵されているものです。学院史編纂室には寿岳が英文学者への道を拓ききっかけとなった自身の卒業論文のほか、教員時代の彼が装幀に協力した卒業アルバムや寿岳へのインタビューシーンを含む創立90周年記念映画『関西学院の歴史（1889～1945）創立から終戦まで』のフィルム、寿岳が研究で培った人脈を活かして作詞を英国の詩人エドモンド・ブランデンに依頼した学院創立60周年記念校歌A Song for Kwansaiの関連資料などが保管されています。また大学図書館には寿岳自筆の献辞が付された著書があります（寄贈本の一部は一般図書として現在も利用されています）。このような学院所蔵の資料からは、寿岳の研究が学院に寄与する様子も紹介することができました。

次に寿岳ゆかりの施設です。京都府向日市に現在も残る寿岳邸「向日庵」からは日記や来訪者の芳名録、書簡など交友関係をあらわす資料を中心に借りしました。資料からは、国内外問わず多くの人びとと出会っていたことがうかがえます。戦時下においても反戦を信条として、その縁を大切にすることが彼の研究活動の大きな支えとなりました。また寿岳の没後、娘の章子から和紙関係の資料や文献が寄贈された兵庫県多可町の和紙博物館「寿岳文庫」からは、世界でもっとも認められた向日庵本『絵本どんきほうて』や寿岳が集めた全国の和紙のうち兵庫県のものな

どを借用し展示しました。杉原谷村（現・多可町）が杉原紙という和紙の発祥地であることを明らかにしたのは、寿岳と彼の京都帝国大学（現・京都大学）文学部選科時代の恩師新村出による調査でした。その後、1972年には町立の杉原紙研究所が設立され、現在もこの研究所で杉原紙が漉かれています。

最後は個人のコレクションです。寿岳の著書や、寿岳とかわった関西学院出身の英文学者（岩橋武夫、曾根保、竹友藻風、志賀勝、荻田庄五郎）の著書などを展示しました。関係各所のみなさまには多大なるご協力を賜りました。ここに記して深く感謝いたします。

開催記念講演会

「寿岳文章—知識人の肖像—」

会期中の10月20日（金）には、大学図書館ホールにて中島俊郎氏（甲南大学名誉教授、日本ヴィクトリア朝文化研究会会長、NPO法人向日庵理事長）による開催記念講演会「寿岳文章—知識人の肖像—」がおこなわれました。寿岳の研究活動の根底にある宗教的真理の追求について、人柄や交友関係などさまざまなエピソードを交えながらお話いただきました。



▲講演会の様子（中島俊郎氏）

展覧会報告 II

平常展

校歌制定 90 周年

《空の翼》展

校歌《空の翼》制定 90 周年を記念し、《空の翼》ができるまでの道のりを紹介しました。

2024.2.19(月) ▶ 4.20(土)

※休館：日曜日、祝日、3月21日(金)

開館日数 51日

風景 『高等商業学部第 18 回卒業アルバム』より 1933 年
人物 左：山田耕筰、右：北原白秋 1933 年
楽譜 山田耕筰《空の翼》自筆譜 1933 年



大学博物館は年に数回、学院の歴史を紹介する「平常展」という展覧会を開催しています。博物館を訪れてくださるみなさまとともに本学が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考えています。

オリジナルの校歌を求めて

《空の翼》ができるまで

校歌《空の翼》は2023年度で制定90周年を迎えました。これを記念し、本展覧会では《空の翼》制定の歴史を紹介しました。作曲者・山田耕筰の《空の翼》自筆譜を中心に、初公開資料である作詞者・北原白秋の《空の翼》作詞原稿など22点を展示しました。

1933年に《空の翼》が校歌に制定された背景には、学院のキャンパス移転と大学開設がありました。学院は1929年に神戸・原田の森(現・神戸市灘区)から現在の上ヶ原キャンパスへと移転します。さらに1931年、学院は大学の開設を決定し、1932年に大学予科が開かれました。キャンパスを一新し、大学を擁した学院では、オリジナルの新たな校歌を望む声が上がりました。なぜなら、それまで学院で校歌として歌われていた Old Kwansai はアメリカのプリンストン大学の校歌 Old Nassau の歌詞を一部改変して作られたものだったからです。

移転前の原田の森キャンパスの様子がわかる資料として、学院の普通学部(現・中学部)の卒業生で神戸を代表する版画家・神原浩のエッチングをご覧いただきました。また、新校歌を求める当時の学院内の意見は、『関西学院新聞』を通して紹介しました。



▲展示室の様子
手前から、音源が聞けるタブレット、レコード《空の翼》、山田耕筰《空の翼》自筆譜

学生たちの姿

山田耕筰と関西学院

山田耕筰は関西学院の出身者で、1902年から1904年まで普通学部普通科で学びました。学院編入前から義理の兄に西洋音楽を教わっていた山田は、学院でグリークラブと野球部に所属し、チャペルオルガニストも務めました。学院在学中に初めての作曲にも取り組んでいます。

東京音楽学校やドイツ留学を経て日本を代表する作曲家のひとりとなった山田のもとへ、当時の学生会会長・菅沼安人が校歌の作曲依頼をしたことで《空の翼》は生まれます。菅沼に山田を紹介したのは、かつて山田を指導した吉岡美国第2代院長でした。

《空の翼》をきっかけにして山田は学院に依頼され、その後も曲を作りました。本展では、山田作曲による《緑濃き甲山》、《関西学院頌歌》、A Song for Kwansai、《打ち振れ旗を》に関する資料もご覧いただきました。さらに会場ではタブレットを用いて関西学院グリークラブが歌う《空の翼》、《緑濃き甲山》、A Song for Kwansai、《打ち振れ旗を》、展示されたレコード版《空の翼》A面(山田耕筰独唱)とB面(コロムビア合唱団)の音声も展示し

ました。また、今も《空の翼》が学生たちに愛され、歌い継がれていることを示す資料として、2019年と2022年に中央芝生で開催された「《空の翼》を歌唱するイベント」の様子を映像で紹介しました。出品リストは当館webサイトの展覧会ページからダウンロードいただけます。

歴史を感じながら

撮影スポット「竣工当時の時計台」

平常展では、学院の歴史を楽しみながら知ってもらえるように撮影スポットを設置しています。今回は竣工当時の時計台を撮影用背景に、タイマー撮影に使えるスマホスタンド(全機種対応)を設置しました。

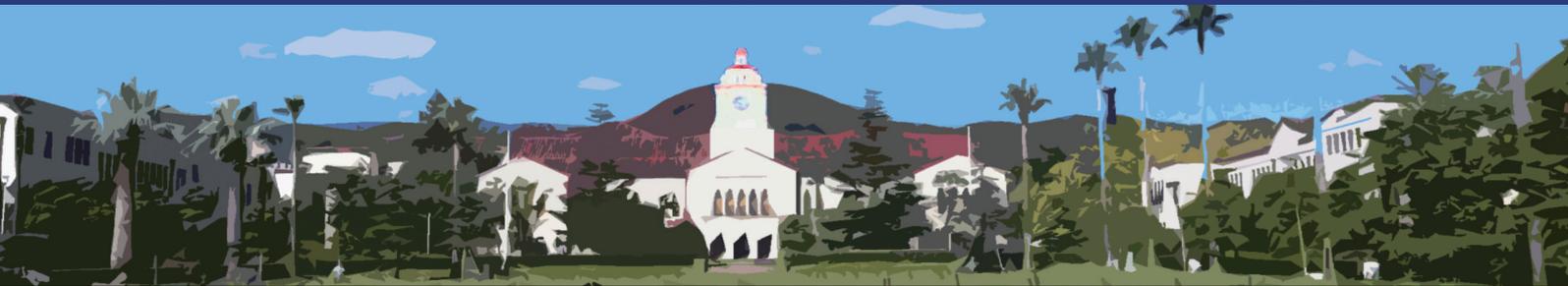


▲撮影スポットの風景

特集陳列

井原西鶴の貴重本

同時開催の特集陳列では「井原西鶴没後330年記念 関西学院大学図書館所蔵西鶴貴重本展」と題し、大学図書館所蔵の西鶴貴重本コレクションを大学博物館として初公開しました。解説は文学部の森田雅也教授によるものです。前期(2月19日～3月19日)と後期(3月22日～4月20日)で展示する頁を変え、お楽しみいただきました。



平常展の予告

ヴォーリス建築写真展



VORIES TIME

2024年5月13日(月)～7月13日(土)

※休館：日曜日

後援：公益財団法人 近江兄弟社、西宮市

1929年、関西学院は創立の地である原田の森キャンパス(現・神戸市灘区)を去り、上ヶ原キャンパスへ移転しました。この新校地の設計を任されたのは、W. M. ヴォーリス (William Merrell Vories, 1880-1964) 率いるヴォーリス建築事務所でした。ヴォーリスは原田の森キャンパス時代から校舎等を手がけ、学院の発展はヴォーリス建築とともにありました。

現在大学博物館が入っている時計台は、キャンパス移転時に図書館として建てられたヴォーリス建築です。そして2024年、大学博物館は開館10周年、ヴォーリスは没後60年を迎えます。これを記念し、本展では写真家・桃井一至氏が撮影した全国各地のヴォーリス建築を、また9月

28日(土)からはじまる企画展では図面などの資料を通して関西学院のヴォーリス建築を紹介します(企画展の詳細は次号参照)。

桃井氏は滋賀県近江八幡市にある近江兄弟社学園(現・ヴォーリス学園)で幼稚園から高校まで学び、校舎はもちろん学園周辺にあるヴォーリス建築にも親しみながら育ちました。上京後、ヴォーリス建築が全国各地にあることを知り、その姿を撮り続けています。本展は早稲田スコットホール(2017年)やソニーストア大阪 α Plaza(2019年)、ヴォーリス学園ハイド記念館(2022年)で開催され人気を博した写真展です。引き継がれ愛されてきた各地のヴォーリス建築を、桃井氏の作品からご覧ください。

【開催記念対談講演会】

「ヴォーリスさんと建築の物語」
～光と風と
バンザイなこっちゃ!～

講師：桃井 一至 氏
藪 秀実 氏(ヴォーリス記念館館長)

日時：2024年5月31日(金)
13:20～15:00

会場：西宮上ヶ原キャンパス
文学部チャペル

【関連イベント】

写真家に教わる!

ヴォーリス建築カメラレッスン

共催：OMデジタルソリューションズ社

講師：桃井 一至 氏

日時：2024年6月14日(金)
13:20～15:50

会場：西宮上ヶ原キャンパス
時計台2階実習室

申込方法：専用申込フォーム
(先着20名限定、学生先行予約)

参加費用：無料

桃井氏から撮影のテクニックを教わり、西宮上ヶ原キャンパスのヴォーリス建築を撮影します。申込みは学生先行でおこない、定員に達し次第、終了します。



PROFILE

桃井一至 氏 KAZUSHI MOMOI

京都府生まれ。写真家・長友健二氏に師事し1990年に独立。雑誌やカタログの撮影をはじめ、カメラ専門誌などに執筆。丁寧なテクニック解説に定評がある。

公益社団法人 日本写真家協会会員。



関西学院大学時計台 / 兵庫県西宮市



ピアノン記念館 / 北海道北見市



関西学院大学博物館通信 第16号

KGU MUSEUM NEWS No.16

2024.4.30

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ヶ原一番町 1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <https://www.kwansei.ac.jp/museum>